

# 語り継ぎたい 美しい日本人 の物語

連載  
第9回



日本人が観から子供へと語り継いできた美しい物語、四季に恵まれた豊かな風土と人々の美徳を映し出す数々の物語がいま忘れ去られてしまっている。本連載では、現役の高校教師であり文学に造詣が深い占部賢志先生に、子供たちに伝えたい日本人の物語をシリーズでご紹介いただく。

## 高貴な日本人の 心ばえ

### ロシア使節団と幕末日本人

福岡県立太宰府高等学校教諭  
占部賢志

うらべ・けんし——昭和25年福岡生まれ。九州大学大学院博士課程修了。福岡県の高校教諭として奉職、担当は日本史。福岡県立学校生徒指導主事研究協議会事務局長、福岡県いじめ問題対策協議会委員など歴任。現在は現役教師が学ぶNPO法人「師範塾」塾長も務める。著書に「歴史の「い」ち」「歴・史の「い」ち」(ともにマロウワー研究)などがある。

日露交渉中の「安政東海海難」

時は幕末、嘉永七(一八五四年)一月四日、十一月末に安政と改元。の午前八時を回った頃でした。折からの日露和親条約締結交渉中の地、伊豆半島下田を安政東海海難が襲ったのです。推定マズニードは八、四、沿岸地域は損害が大きく、下田も例外ではありませんでした。

地震発生時、地に滞在していた川路聖謨ら幕府要人はまもなく襲来するであろう津波を予備し、近くの大安寺山に駆け登り、すんでのところで難を逃れています。当時の記録によると、下田の被害は、全戸数八百五十六戸のうち、全壊失は八百十五戸、半壊は二百十五、死者八十五人、その他旅人や近郊の者などを加えると、約六百人近くが溺死したと伝えられています。

この時、下田港に停泊中のロシア使節団が乗船すデリアナ号も津波の被害に直面します。この船は、長さ五十三呎、幅十四呎の二千トンの長木造帆船で、大筒五十二挺を装備した最新鋭の艦船でした。

タイ(短艇)を海面下ろし、これに水兵が乗り込み、本艦に結びつけた引き綱を持ってデリアナ号を海岸に向かうべく曳航しようとするが、逆巻く波にあおられ

た恐怖感が、波はたて間なく次々とカッターを翻弄し、逆巻く激浪が彼らの姿を翻弄し、視界がさらえきった……沈没だ！ 私たちは恐怖が絶望に駆られて叫んだ。前さへしたる多くの村人たちが、生々しく記録されています。

この時でした。波浪に吞まれようとするデリアナ号を救おうと早朝の海岸一帯に数多くの村人たちが結果としている姿目に見え、できず留められた。日誌の続きです。

「この日が信じられぬほどの出来事だった。私たちが運命を見守るべく、早朝から千人の日本の男女が押しかけて来たのである。日本人たちは、私たちがカッターを離り出した意味を早く察し、激浪がカッターを岸へはらり出すに違いないと見取り、綱に結びつけて身軽にし、その体で、カッターが岸へ着くやいな

やそを捉え、潮の引く勢いで沖へ奪われぬように、しっかりと支えてくれたのだ。

こうして多くの村人が身を捨てて海岸をデリアナ号とあいだに命のロープが繋いだのです。

無難であっても、この命綱を頼りにボートやいかたを組んで波間を進むことが可能となりました。最後に艦を離れた「チャーチンが海岸に辿り着いた時点で乗員全員を救ったのです。

#### 宮崎村住民の献身

しかし、村人の活動は五百名におよぶロシア人救出が終わったものではありません。実は艦内の荷物などは、翌日大型ボートで往復して降ろされたため、身軽となったデリアナ号は未だ沈没は免れていたので、そこで下田港まで曳航すべく第二段階の援助に当たることになりました。

このために駿河、伊豆両国の十五歳から六十歳以上の漁師が結果としてデリアナ号の援本の元綱を結

びつけ、さらにそこから多数の枝綱に引いて百艘近い漁船で曳航したのです。しかし、再び海上を切られ始めたため、漁師は元綱を断断せざるを得ず、デリアナ号は海の深淵と消えいった。

プチャーチン一行の絶望感がビビクに達したのは言うまでもありません。その上、真冬の寒風は間断なく彼らに吹きつけていました。これを見た宮崎村の村民は、異国の人々への惨状であら限りの友愛の手を差し伸べたのです。

ある人々は大雪で固いの網屋と日除けをつくって、私たちが悪天を避けられるようにしてくれました。別の人々は、等のごさや敷物、毛布や綿入などの着物、それいろいろのな履物を持って来。米、酒、蜜柑、魚、卵を持参した人もあった。何人かの日本人が目の前で上衣を脱ぎ、私たちの仲間の手で取りかき、私たちが着ている水兵たちには与えられた驚へきことであ

異国の海岸に打ち上げられたロシア人たちの姿。こうした日本人の側面情に接し、いかほど胸打た

デリアナ号が巨大津波に採まられて水兵の命に懸けられる様子、当事者たちが「フレグット・デリアナ号航海誌」に生々しく証言しています。「まるで渦巻の中に投げ込まれた木片のように、艦は回旋し、引き裂かれ、打ち叩かれた。真実は音を立てて裂け、舷側は切れ、船体は右に左に大きく傾いた。

このように、デリアナ号はかつてない危機感に見舞われたのです。海に襲撃がった命のロープ

ロシア使節プチャーチンは船体の早期離陸のため、幕府代表に適切な離陸の探索を願い出します。幕府は食糧を供与し、修理についても許可を与え、船体の修理場所については好余曲折を経て、西伊豆の田港に決定します。こうして、満身創痍のデリアナ号は田港を目指して出航したものの、強風が吹き寄せられ、代用の舵も折られてしまし、駿河湾北方の宮崎海岸(現富士市下田)の沖合ありまで流された挙げ句、航行不能に陥余るのでした。

乗組員は窮余の一策としてカッ